



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成：自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用 [全文の要約]
Author(s)	斉藤, 巧弥
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13979号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78339
Type	doctoral thesis
File Information	Takuya_Saito_summary.pdf



令和元年度博士論文

1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成

— 自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用 —

斉藤 巧弥

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

国際広報メディア専攻

【要約】

章立て

序論 ゲイアイデンティティを問う

1. 研究の目的と背景
2. 1990年代におけるアイデンティティの議論
3. 分析枠組み

第1章 ゲイ雑誌『バディ』と「ゲイライフ」——「ゲイ」としての自己肯定と生き方の形成

1. 日本のゲイ雑誌と『バディ』
2. 「ゲイライフ」の紹介 —— 強い男のハイパーマガジン (1993-1997)
3. 「ハッピー」という「夢」 —— 僕らのハッピー・ゲイ・ライフ (1997-2000)
4. 「現実」との衝突と「男」の生き方 —— GAY LIFE MAGAZINE (2001-2008)
5. ゲイアイデンティティとコミュニティの維持 —— Badi UP! (2009-2019)
6. 安全なアイデンティティ —— 「夢」と「現実」の間で

第2章 ゲイマンガに描かれるゲイの物語 —— 変化する悩みとその提示／対処／回避

1. 「ゲイマンガ」とは
2. 女性との交際をめぐる葛藤 —— 1990年代までのゲイ男性向けゲイマンガ
3. ゲイコミュニティにおける恋愛と悩み —— 2000年代以降のゲイ男性向けゲイマンガ
4. 〈社会〉の描写と回避 —— 1980-2010年代のゲイ男性向けゲイマンガ
5. マイノリティであることを経験する —— 一般向けゲイマンガ
6. オルタナティヴ・ストーリーの形成

第3章 「ゲイリブ」による社会運動とコミュニティ形成

——「札幌ミーティング」による活動を事例に

1. 日本のゲイグループと札幌ミーティング
2. 同性愛者の二極化 —— 「ホモ」と「リブガマ」
3. 新しいコミュニティとしての札幌ミーティング
4. 対外的活動 —— ローカルメディアへの抗議活動
5. 対内的活動 —— ゲイ男性の取り込みと「ゲイ」への誘導
6. レズビアンの活動 —— コミュニティの形成と「遊び」の重視
7. 「遊び」と「真面目」な活動のジレンマ

第4章 セクシュアルマイノリティのパレードにおける演出

—— 連帯におけるアイデンティティとパレードの中のゲイ男性

1. 日本のパレードと札幌のパレード
2. 「政治」と「祭」をめぐる論争
3. パレードの方向付けと連帯の問題
4. パレード行進のパフォーマンス —— 可視化と差異化
5. ゲイ男性のパフォーマンス —— 「遊び」によるまとめ上げと差異化
6. 〈差別なき社会〉におけるパレードと表象

第5章 ゲイアイデンティティの「今」と「未来」

1. 表象の対立 —— 「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」
2. 自己変革活動から社会変革活動へ？
3. モラトリアム時代のゲイ男性
4. ゲイアイデンティティの終焉？

おわりに

1. 議論の要約
2. 本研究の成果と今後の課題

本研究では、ゲイ男性当事者によって行われてきた自己変革／社会変革活動を取り上げ、それぞれの活動がゲイ男性のいかなる表象を提示することによって社会的アイデンティティを形成してきたのか、そして自己変革／社会変革活動の間にいかなる関係性があったのかを論じた。

序論ではまず、1990年代に生じた出来事をまとめ、ゲイ男性を取り巻く社会的状況がその時期から転換していったことを示した。ゲイ男性当事者による言論活動が始まったり、同性愛者への差別を争った裁判が起こされたり、コミュニティ活動が始まったりしたのが1990年代であった。同性愛についての学術的な研究が始まったのもこの時期であった。動くゲイとレズビアン会（アカー）やゲイスタディーズの議論によって、ゲイ男性の政治的アイデンティティの形成が目指されてきた。しかし同時期に登場したクィアスタディーズによって、ゲイスタディーズが目指してきた一枚岩的なアイデンティティが批判された。だが、クィアがアイデンティティの否定として受容されたことによって、アイデンティティについて議論すること自体も避けられてきた可能性を指摘した。一枚岩的なアイデンティティは確かに特定の人を排除することがあるが、しかし実際に、ゲイとしてのアイデンティティを形成しようとしてきた、あるいは形成することになった活動が存在してきたこと自体を無視するべきではない。「LGBT ブーム」と呼ばれる2015年以降の日本のセクシュアルマイノリティの運動を考えていくにあたって、これまで実際にどのような活動が行われてきたのかをつぶさに分析することは重要であると論じた。本研究では「アイデンティティ」をゴフマン的な自己提示として捉え、オーディエンスによって戦略的に使い分けられるパフォーマンスとして捉えた。またゲイ男性による「活動」は社会運動論の議論を参考にし、「新しい社会運動」の特徴である「社会変革」と「自己変革」という二つの側面に注目することとした。この「アイデンティティ」と「活動」の視点を統合し、「主にゲイ男性をターゲットとする自己変革活動」と「主に異性愛社会をターゲットとする社会変革活動」の二つに注目し、この二つのゲイ男性による活動が1990年代以降に形成してきたアイデンティティについて論じた。

第1章では、自己変革活動であり、ゲイ男性をターゲットとした活動としてゲイ雑誌『バディ』を取り上げ、『バディ』の編者が「ゲイ」であること、「ゲイ」として生きること（ゲイライフ）についていかなる言説を形成していたのかを分析した。雑誌のコンセプトが変更された時期を区切りとして1993年の創刊から2019年の休刊までを4つの期間に分け、各期間の『バディ』の特徴に注目することでその実践を分析した。1993年の創刊当初は「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を紹介し、それを「普通」であることを否定する姿勢として提示していた。差別を受け「悩む」という「現実」があることを認知しながら、1990年代末には、「ハッピー」であるという「夢」が強調されるようになり、〈現実逃避〉を行うことで自己肯定感を形成しようとしていた。またこの時期から、わかりやすい生き方のモデルとして、（男性同士の）結婚が提示され始めた。2000年代に入ってから、それまで「夢」として語られていた「ハッピー」が「現実」となったとして、それを前提に誌面作りが行われるようになった。より具体的・現実的な生き方のモデルを提示しようという試みが登場し始めるなか、結婚ではなく独身として生きていかなければならないという現実にはゲイ男性は直面し始めた。特に三十代のゲイ男性が直面する現実の生き方である、生涯独身として生きていくという将来の不安、そして三十代になると魅力と「モテ」を失うという不安を解消するために、

『バディ』は経済的自立・安定を軸とする「男」としての生き方を提示し始めた。そして2010年代には、「ゲイ」であるという意識や「ゲイコミュニティ」が衰退しつつあることを認識した編者は、ゲイコミュニティを盛り上げ、「ゲイ」であることを再強調し、それらを維持することに取り組み始めた。

『バディ』の主張は、「ハッピー」であることと「悩む」ことをどのように差し出していくかという戦略によって形作られており、全時期で「ハッピー」というキーワードによって言説が形成されていた。1990年代は「不幸」への抵抗として「ハッピー」が唱えられ、2000年代からは「ハッピー」をすべてのゲイ男性がすでに享受しているものとして差し出すようになった。『バディ』による「ゲイライフ」の形成は確かに多くのゲイ男性に自己肯定感を与えることに貢献したと思われるが、社会における被差別者やマイノリティとしての位置付けではなく、規範の中で折り合いをつけて生きていくこと、「男」であることを強調することによって、マジョリティとしての立場を維持することに結果として繋がっていった。創刊初期に規範への抵抗として捉えられていた「ゲイ」というあり方は、「現実」からは距離を置き、規範への同化へと舵を切ることによって、安全なアイデンティティとしての意味合いを強くしていった。「ハッピー」のアイデンティティは、それを經由して社会変革活動へと至るための過程として捉えられている側面もあったが、その道筋自体が徐々に後景化していった。

第2章では、ゲイ男性によってゲイ男性向けに描かれたマンガ（ゲイ男性をターゲットとする活動／自己変革）と、一般向けに描かれたマンガ（非当事者をターゲットとする活動／社会変革）を取り上げ、どのような物語が描かれているのかを分析した。「現実的」なアドバイスをしようとしてきた『バディ』と違い、フィクションであるマンガが「現実」をどう扱い、それをどう乗り越えようとしていたのかを分析した。1990年代までのゲイ男性向けゲイマンガで描かれる恋愛の物語を見ると、女性と結婚をしなければいけないという、異性愛社会を原因とする葛藤が描かれ、異性愛社会との関わりの中でゲイ男性のアイデンティティは揺らいでいた。しかし2000年代以降に描かれる恋愛の物語では、悩みの原因がゲイ男性同士の浮気や不信感へと移行し、その悩みを解決するため、純愛が成立するための舞台が設定されていた。異性愛社会、家族、社会問題といったトピックは避けられたり、あるいは読み替えられることで非抑圧的なものにされていた。対して一般向けゲイマンガは、想定される読者としての異性愛者に、ゲイやLGBTについて教示する意図によって描かれていた。実際に生じた差別事件を取り上げたり、ゲイ男性が普段の生活で経験する差別や抑圧、ゲイであることを隠さなければいけない苦痛などが描かれていた。ゲイ男性向けゲイマンガでは異性愛社会を原因とする「悩み」ではなく、ゲイコミュニティにおける〈悩み〉が描かれるようになり、比較的「幸せ」な存在として描かれる一方で、一般向けゲイマンガでは差別の存在を積極的に描くことで、社会における被差別者として「悩む」ゲイ男性が描かれていた。

一般向けゲイマンガで意図されていたのは、ゲイ男性が置かれている差別の「現実」を描くことでそれを社会問題化することであった。一方、ゲイ男性向けゲイマンガで2000年代からゲイコミュニティを描くものが増えていった背景には、「悩むゲイ」とは異なるオルタナティブな物語を提示したいという欲求があることが示唆された。しかしこの欲求は、作者が新しい物語によってゲイであることの新しいアイデンティティを形成するという欲求であると同時に、「現実」から距離を置き、

「ハッピー」な物語に自身を投影したいという読者の欲求を汲み取った戦略的な物語の提示でもあったと考えられる。『バディ』でゲイライフの内実が規範への抵抗から同化へと変わり、「男」としての生き方によって「現実」との折り合いをつけるようになっていったように、ゲイ男性向けゲイマンガの表象も、マイノリティとしての社会的立ち位置を受け入れることへの忌避感と背中合わせであった。

第3章では、社会変革を基礎的な目標とし、非当事者をターゲットとする傾向の強い活動として、ゲイリブ（ゲイリベレーション）団体である札幌ミーティングの活動を分析した。札幌ミーティングは札幌という地方においてセクシュアルマイノリティの生きやすい社会を作るために、広く社会に向けて発言したり抗議活動をしながら、当事者のコミュニティも形成しようとしていた。自己変革を軸としていた第2章までの事例と違い社会変革を主軸とする活動では、どのようなあり方が模索されていたのか、どのように「ハッピー」と「悩み」の表象が使い分けられてきたのかを論じた。札幌ミーティングのゲイ男性は「ゲイ」としてのアイデンティティの形成に努めており、性的・クローゼットの「ホモ」から差異化された「ゲイ」に、社会や当事者の意識を変えるために積極的・能動的に活動を行うアクターという政治性を付与していた。「ゲイ」としてのアイデンティティを形成するコミュニティとしての札幌ミーティングでは、全人格的な人間関係の形成が目指され、性的な場であるゲイバーやハッテン場から区別された。「ゲイ」であるためにはただ「遊び」を求める人は歓迎されず、札幌ミーティングがただの交流の場となってしまうことが否定され、「遊び」と「真面目」な活動＝社会変革活動のバランスが模索されていた。ゲイ男性のメンバーはその政治性をもとに、社会に対する抗議活動を行ってきた。同性愛者への差別が比較的に見えにくい〈差別なき社会〉において差別の存在を人々に認識させ社会問題化し、「ホモ」という言葉で性的な存在として一方的にステレオタイプを形成されることを批判していた。札幌ミーティングはこの政治性の形成を、ブランチ制という組織形態によって後押ししていた。その中では、「遊び」と社会変革活動の関係性が問題となり、いかに「遊び」を経由して社会変革活動へと人々を動員するかが模索されていた。特筆する活動としてはゲイナイトを開催し、一般のゲイ男性を「享楽」イベントに誘い込みながらもそこで政治的メッセージを発することで、多くのゲイ男性をゲイリブに動員しようとしていた。

政治的なアイデンティティとしての「ゲイ」を形成しようとしていた札幌ミーティングのゲイ男性も、社会には抗議活動によって「悩むゲイ」を提示しつつも、ゲイ男性には「遊び」に結びつけられる「ハッピーなゲイ」を提示していた。彼らが抗議活動で行っていたのは、同性愛者に対する差別を可視化・社会問題化することであり、同性愛者は差別に悩んでいることを伝えるということであった。こうした取り組みは札幌ミーティングの普段の活動でも行われ、社会とゲイ男性当事者の意識を変える「真面目」な活動が行われてきた。しかし、特に札幌ミーティングに所属しない多くのゲイ男性をゲイリブに動員するためには、「遊び」、「ハッピー」が有効であることを知っていた。ただのセックスや「遊び」と結びつけられるゲイバーやハッテン場を札幌ミーティングのメンバーは否定していたが、「遊び」を通して実際に多くのゲイ男性が自己肯定を形成してきたこと、「真面目」な話題に興味のないゲイ男性も「楽しさ」には興味を持つことを知っていた。また同時に、差別が見えにくく、その経験を共有することも難しい〈差別なき社会〉では、差別の経験ではない別の何かの方がゲイ男性をまとめ上げることが容易であった。できる限り多くの人をゲイリブに動員

したり触れさせたりするには、「現実」への取り組みだけではなく、ゲイナイトのような「ハッピー」の印象によって、表面的には「現実」を見せないことが重要であった。こうした活動によって、一般のゲイ男性を〈「遊び」から社会変革活動へ〉導こうとしていた。

第4章では、もっとも公的な場で行われ、非当事者へ働きかける社会変革活動としての側面を強く持つセクシュアルマイノリティのパレードを扱い、そこでどのような演出によってゲイ男性が表象されているのかを分析した。連帯におけるアイデンティティの問題、パレード全体の傾向、そしてその中でのゲイ男性の位置付けに焦点を当てた。パレードでは開催当初から、「パレードとは〈政治〉なのか〈祭〉なのか」という議論があり、それは前章で見た、「遊び」と社会変革活動の関係性を問う議論であった。パレードは「民主的な場」としていかなる参加者もパフォーマンスも排除しない旨を掲げてきたため、「遊び」と社会変革活動を分離することが困難であった。このことが、〈「遊び」から社会変革活動へ〉という過程を困難とし、社会変革活動としてのパレードがただの「バカ騒ぎ」に引き戻される可能性が問われていた。その二つを首尾良く維持するために、「政治と祭りの融合」としてのパレードが模索されていった。連帯の問題に関しては、パレードを他のマイノリティも表象する活動として行うか、それともセクシュアルマイノリティを表象する活動として行うかの間でジレンマが生じていた。一方で、パレードが開始された1990年代は「ゲイ」というアイデンティティの形成が重視されていた時代であったにも関わらず、「ゲイ」や「レズビアン」という立場から距離を置いてセクシュアルマイノリティ同士が連帯することはそれほど問題とはされなかった。その理由は、民主的な場としてのパレードでは、連帯をしながらも「ゲイ」としての立ち位置からのパフォーマンスがむしろ可能であったからである。パレードの全体的なパフォーマンスは、1990年代は〈差別をやめよ〉という抗議／要求型の傾向が強かったが、2000年代には〈私たちはここにいます〉という、柔和な存在主張／可視化型へと変わっていった。その理由は、〈差別なき社会〉において異性愛者をも含む人々を動員するため、そして特に一般のゲイ男性をパレードに動員するためであった。DJフロート、バディフロート、ゲイバーフロートなどのゲイ企業を主体としたフロート（山車）によってパレードが彩られ、「ゲイナイト」のような「遊び」としての演出が行われてきた。その中ではゲイカルチャーの中心を担うドラッグクイーンとゴーゴーボーイが中心的なパフォーマーとして活躍し、〈わかりやすい差異〉としての「ゲイ」を傍観者へ提示していた。同性愛者への差別が見えにくい社会において、ゲイ男性自身も差別を受けた経験によってつながりを形成しにくい。そのため、パレードに参加する「楽しさ」や「幸せ」という感情、ゲイカルチャーという共通の趣味嗜好によって人々が動員されていった。

札幌のパレードは「政治と祭りの融合」として当事者へも非当事者へも働きかけを行うことが目指されてきたが、いかにして社会に働きかけるかという問いに加えて、いかにゲイ男性を動員するかという問いへの取り組みも重要になっていったことにより、「ハッピー」の印象がパレードを覆うようになっていった。〈差別なき社会〉において異性愛者にもゲイ男性にも働きかけを行うために、パレード行進でのパフォーマンスは存在主張／可視化型へと変化していき、社会変革のための具体的な主張は唱えられなくなっていった。パレード行進は「ハッピー」で脚色され、行政などへの直接的な働きかけという社会変革活動は裏舞台へと移動することで、パレードの印象は戦略的に使い分けがされるようになっていた。パレードという非日常の空間において行われるドラッグやゴーゴ

一のパフォーマンスは、可視化のための見世物としての〈わかりやすい〉差異として利用される側面が強いため、異性愛者にとっても受け入れることが容易であった。

第5章では、全体の議論を発展させつつ統括する議論を行った。表象の使い分けという点に関しては、全体的な傾向として、社会に対しては「悩むゲイ」を提示することで差別の存在を社会問題化しようとする一方で、ゲイ男性に対しては「ハッピーなゲイ」を提示するという戦略があった。この「ハッピーなゲイ」は「悩むゲイ」をいっそう言説化しようとする1990年代の状況において反動／抵抗として登場したものであった。こうした中、ゲイコミュニティにおいて「ハッピーなゲイ」の表象が流布されることで、逆に「悩むゲイ」が周縁化される状況が作られていった。結果として「悩むゲイ」は声をあげにくくなり、また「ハッピー」によって動員されていったゲイ男性は「男」であるというジェンダーの問題や規範の存在を疑わなくなっていく可能性が示唆された。「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」という二項対立自体が孕む問題として、〈悩みや差別のある状態からそれらのない幸福な状態へ〉という道筋が暗に想定されることによって、悩みの解決が規範化されたり、マイノリティ内のさまざまな差異が覆い隠されてしまう可能性が指摘された。

自己変革活動と社会変革活動の関係性に関しては、すべての章の事例において、自己変革が達成されることによって社会変革活動へとゲイ男性が移行していくことが想定され、さまざまな戦略によってその移行が目指されていた。しかし必ずしも彼らが社会変革へと移行するわけではないという困難があった。前提とされる自己変革の中でも特に、恋愛／性的出会いの充足がゲイ男性に特有の問題であったことに注目して考察をした。現在の多くのゲイ男性が抱える悩みが、異性愛社会での差別といった「悩み」ではなく、ゲイコミュニティ内での「モテ」や性愛に関する〈悩み〉であると考えられる状況では、社会変革活動が解決しようとする「悩み」と、多くのゲイ男性が抱える〈悩み〉にズレが生じている可能性があった。また「モテ」に付随する男性性の規範は〈私的〉なものと捉えられるため、社会変革活動はそれに対して限定的な異議申し立てしかできない。以上の問題を1990年代以降のゲイ男性の「結婚」と共に捉えると、ゲイ男性は「ゲイライフ」を獲得し、結婚から距離を置くことができるようになったことで、女性との結婚という最大の悩みが解消され、モラトリアムへと〈解放〉されていることがわかった。男性性というマジョリティ性を利用したり、規範から距離を置くことのできるモラトリアム期にいるゲイ男性は、必ずしも社会変革を求めはしないことが示唆された。だが、昨今は「愛」の言説によってゲイ男性も社会変革活動へと動員されつつあった。昨今新たな隆盛を見せる同性婚合法化運動とパレードが「愛」によって脚色され、〈差別なき社会〉において当事者も非当事者も動員されている。日本のゲイ男性は差別への反動としてのプライドを持ちにくく、またモラトリアムへと〈解放〉されてきたため、「弱いアイデンティティ」を持つ傾向がある。こうした状況では、1990年代から取り組まれてきた「ゲイ」というアイデンティティの形成とそれをもとにした活動は、すでに限界を見せ始めていたり、あるいはそもそも困難であった可能性が示唆された。